

“What’s this new crap? What’s wrong with the old crap?” changing history teaching in Oakland, California

「この新しいがらくたは何？古いがらくたの何が問題なの？」カリフォルニア州オークランドでの歴史教育変革

担当：川口広美（広島大学大学院教育学研究科）

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

■著者情報

著者名：Shelly Wintraub

研究関心：カリフォルニア大学バークレー校で歴史学のBAを取得後、サンフランシスコ州立大学でMA in Educationを取得。オークランドにおいて社会科を15年間教えていた。カリフォルニア州オークランドでのカリキュラム改革及びスタッフ養成の担当者。実践者として、Bay Area Writing Projectを進めており、teaching awardを多数受賞している。なお、Peter Seixasは、International Review of History Educationの第3巻において、このオークランド州の改革の様子について言及しており、その際にもShelly Wintraubについても、カリキュラム改革で採用された重要人物の1人として説明をしている。Seixasによれば、このBay Area Writing Projectは、英語と社会科を横断することを強調しただけでなく、歴史的思考と強く結びついた点に意義があると説明している。（なお、このBay Area Writing Projectは現在でも継続中）

■重要用語

- ・ historiography: 歴史科学
- ・ staff development : スタッフ養成（≒現職教員研修）

■ひとこと概要

書かれた2000年当時、カリフォルニア州オークランドでカリキュラム改革を担当していた筆者が、どのように「歴史的思考」を中心とした教育変革を行っていったか、をナラティブに描き出している。具体的にはまず、教科書採択ができない上でのカリキュラム改革が求められるようになったという文脈の元で、教員研修（staff development）→カリキュラムづくり→評価づくりと向かい、それぞれで出てきた課題をどうクリアしていったかが描かれている。この変革はまだ途上であり、今後の結果を見守るという状況で描かれている。

■議論したいこと

- ・ 日本の歴史教師の教科書を網羅する見方を変えるためにはどうしたら効果的だと考えるか？
（例えば、今回の方法論を辿れば変わるのだろうか？でも、現職研修がそこまで効果的なのか・・・）
- ・ 教師が教科書ではなく、学習指導要領やスタンダードを基に、参照枠として教科書をみとることができるようにするにはどうしたらよいだろうか？

■ まとめ

1. 目的と得られた教訓

1) 目的 (p.178)

この本の中心的問いの1つ「どのように K-12 の学校における歴史教育を改革できるのか？」

→オークランドにある学校 (Oakland Unified schools) では、この問題について何年もかけて応えてこようとしている。本章では、学区が行ってきた取り組みの1部をナラティブとして共有することで、他の学区にとってすべきこと・すべきではないことの示唆が得られるのではないかと期待している。

2) 教訓 (p.179)

・伝統的な歴史授業からの脱却をめざした5年以上もの間に学んだ、以下4つの主要な教訓について言及する。

→教科書を読む、章の最後に問いを出す、講義を聴く、多肢選択試験

1. **しっかりとしたスタッフ養成プログラム**：我々の学区では、スタッフ養成として、大学に勤める歴史学者と連携して、どのように歴史教育が歴史学や歴史学系に対応しているかを議論する。
2. **カリキュラムのマテリアルの開発**：このマテリアルとは、歴史学者がスタッフ養成の場で、歴史的思考の事例をモデリングするために用いるもの。
3. **歴史的思考を重視するアプローチを、学区が正当だとみなしているといえる公的文書（スタンダード）の作成**
4. **教育のモデルとして、またスタンダードそれ自体に力を与えるために、スタンダードと関連付けたアセスメントを作成する。**

→上記の結論は、一見当たり前のようだが、その過程では怒りと論争、達成感と興奮を引き出していくものであった。以下では、ナラティブアプローチで記述する。

2. 変革の過程

1) 1990年の教科書採択

<学区の特質>

大規模（約50000人の生徒）、多文化（①アフリカ系、②ラテン系、③アジア系、④白人）、多言語（自分の学校は54ヶ国語が話される）

→人種をめぐる論争が恒常的

1990年の教科書採択：

多様な宗教・民族団体や警察を巻き込むほどの激しい論争が起こり、教科書が採択できない事態

<筆者の状況>

1990年に始めて歴史—社会科のカリキュラムとスタッフ養成の責任者となる。同時に教科書採択にも関わる（しかし、当時は、教科書採択がそこまで論争的なこととは思っていなかった）

筆者のショック→「なぜ、ここまで論争的になってしまうのか？」

①教師への不信感（特に、白人の教師に対して）

②伝統的なアメリカ史に対する根強い不信感。歴史が現体制の正当化に繋がるのではないかと懸念。

2) 教科書採択論争後

- ・教科書が採択できないという事態にまではならないにしても、単一のナラティブへの不信感や公立学校での教え方に対する不信感は、この学区だけでなく、国全体に蔓延したものである。
- ・学区において、歴史教育の改善についての問題意識が共有化された。

→学区の委員会の問題：「我々は教科書なしに、どのように歴史カリキュラムを改善させればいいのか？」

3) スタッフ養成——歴史科学 (Historiography)

- ・1991年秋：30名のK-12の教師をあつめた3年間のプログラム
- 目的：現職教師と歴史学のディシプリンを繋げること
- ・内容：歴史学者を招聘し、学問研究の進め方や考慮すべき点などの講演やワークショップを実施
- 例) キャンディス・フォーク (Candice Faulk) : エマ・ゴールドマンの伝記を執筆
- 伝記を執筆する際のプロセス：どのようにソースを見つけるか、ゴールドマン自体が私的なものとしておきたい手紙を用いることのためらいなど。
- ・影響(Seixasらのインタビュー結果などから)：①歴史教育の見方が変化した(より能動的なものとして)、②教師と教授の関係性の変化、③受講した教師たちにリーダーシップが育つ(これが最も重要)

4) カリキュラム開発

- (1) 教師からの希望を踏まえ、Matthew Downey (カリフォルニア大学) との協力の下で、第4学年 (カリフォルニア史) のモデル作りを行った。
 - (2) Downey のコンセプト「層化する (Layering)」
 - ① 遺物、②絵や写真などの Visual Evidence、③一次史料、④二次史料、⑤歴史的フィクション

→各段階において、特定の時期の歴史の理解を振り返り、再定義することを求められる。
- ・「歴史キット」を作成：各キットに①～⑤の史料+史料に即した授業案
 - 学校ごとに1つのキットを配布→紛失など多数のトラブルや教師教育の必要性などはありつつも、概ね教師は肯定的(今や教育委員会が教科書を採択しなかったことを幸運に思っているとのこと)。授業変革の可能性に強く影響。

5) スタンダード開発

- ・最後のスタンダードが20年前：歴史的事実のリスト。教師はほとんど無視している状況。
 - ・スタンダード委員会を組織：カリフォルニア州フレームワーク、ナショナルスタンダード(歴史、公民、地理、経済、社会科)、イギリスのスタンダード、Seixasの歴史的思考の分類
- ・カリキュラム開発プロセス
 - (1) 各学年で扱うべきトピックの概要を示す(例)6年：初期の人間、エジプト、インド、クシ、古代中国
課題→歴史学のディシプリンを学んだ教師に何を示せばいいのか？内容の羅列ではないはず・・・
 - (2) 歴史的思考の項目：①年代史的・空間的思考、②エビデンスの利用、③多角的視点と多様性、④解釈、⑤重要性(ナショナルスタンダードやSeixasの本質的概念の提案とも異なるものを選択)
課題→教師のアイデアや実践をどうまとめるか？
 - (3) 教員に「自分だったら南北戦争をどう教える？」と聞き、アイデアを出させた。
課題→・1つの解釈を押し付ける危険性→ナラティブは一切フレームワークに入れなかった。
 - ・事実のリストも入れなかった。

(4) 歴史的思考をいかにして、発展的な方法で示す方法については、Seixasの歴史的思考の発達を利用した。

(しかし、彼は同時に、歴史意識の発達については全く強いリサーチの基盤がないとした) →スタッフ養成の一部に入れる。

6) 評価

- ・学区ベース・州ベースの試験について、教師の抵抗感が強かった。
- ・生徒の行っている行動が、歴史的思考のスタンダードと合致しているかを見取るための評価問題を開発した
(例: 歴史的エビデンスを用いることができているか) ←初めてスタンダードと学区評価をあわせる試み(課題)
- ・学区に多大な貢献を求めた(例: 評価のスコア付け、スコアを基に振り返り改善案を考えた)
- ・「良い(good)」「悪い(weak)」歴史的思考を分けなくてはならない(ここはまだ現在のところ明確ではない)

7) 次のステップへ

- ・スタンダードを創り終えたところで、次の教科書採択が迫ってきた。
- ・次の年には、250名の教員を集めて、ミニ歴史科学シリーズの研修を行う予定。
- ・その後、教科書採択の基準をスタンダードベースで作る予定。

←教科書を採択したとしても、教師には、教科書はカリキュラム全体ではなく、教えるためのツールとしての意識を持ってもらいたい。

8) まとめ

- ・歴史的思考を中核においた歴史教育改革
- スタッフ養成(歴史学者と教師が mutual respect し、継続的な関係へ…)
- カリキュラムを組織(歴史は記憶でなく解釈だベース)
 - 評価(スタンダードに即した評価)
 - スタンダードのドキュメント化(全ての要素を統一的に描き、全てが関連していることを明示化する)

3. 最後に

- ・こうした一連の改革は変化をもたらしたか?
- No(理由)批判的な要素が大きい: リソースの数が足りない、州のスタンダードとのズレ
- ・突然は、変化は起こらない。何の保証もない中では、ただ見守るほかない(いずれは起こるかも)
 - ・ただ、明らかなのは、Old Crapは無意味だということ。将来を作っていく上で歴史が重要だと理解してもらおうのが、New Crapの目的である。